

芳年 激動の時代を生きた鬼才浮世絵師

練馬区立美術館（東京・中村橋）

2018.08.05～09.24

「月岡芳年」(1839～1892)は、幕末から明治前期にかけて活躍した浮世絵師で、歴史絵、美人画、役者絵、風俗画、古典画、合戦絵等多種多様な浮世絵を手がけ、各分野において独特の画風を見せ衝撃的な絵画の描き手として知られ、血の描写が多い残酷な絵を得意としたため「血みどろ絵の芳年」と言われ、特に晩年の10年間に描いた錦絵は芳年画を印象付ける名作・代表作揃いである。

本展は、「芳年」のコレクションとしては質量ともに世界屈指といえる、「西井正気」氏の収蔵品の中から選り優れの「263点」を展示し、「芳年」の画業の全貌を紹介する企画で、およそ15年振りのまさに待望の公開となる企画である。

《芳年武者無類 源牛若丸 熊坂長範》 1883（明治16）年 大判錦絵（部分）



「源牛若丸（源義経）」は義朝の九男、「熊坂長範」は加賀熊坂出身の盗賊で、美濃国を拠点に活動したとされるが、創作された架空の人物であるとされる。

「義経」は、美濃国赤坂（現大垣市）で、「熊野長範」が財宝を狙って夜討ちをかけるという噂を聞き、待ち構えていると松明を持った3人の手下が偵察に現れたので討ち取った。「熊坂」は、松明が消えたことを知ったので一度は退こうとしたが、プライドにかけて「義経」と戦うことを決意し、大勢の手下とともに宿に踏み込む。しかし、手下はことごとく討ち取られて「熊坂」自身も斬り伏せられた。

《芳流閣両雄動》 1885（明治18）年 大判錦絵2枚続



「曲亭馬琴」の読本『南総里見八犬伝』の有名な一場面で、芳流閣という建物の屋根上で、「犬塚信乃」と「犬飼現八」の二人の八犬士がにらみ合っている。「信乃」は追われて屋根に逃げ、捕り物の名手「現八」は命を受けて「信乃」を追い詰める。構図は、師匠「国芳」の同構図の夜の作品とは異なって、昼の情景で鑿二枚続きという長細い空間の対角線と重なるように、屋根を配する大胆で迫力があって、屋根を正面から捉えた面白さが強調されている。

師匠から学んだ伝統的な浮世絵の表現に、明治時代らしい写実的で理知的な表現がよく調和している作品である。